

間狂言(アイ)からみた『白楽天』の原形と背景

京都芸術大学
舞台芸術研究センター特別教授 天野 文雄

能の一部でありながら、鑑賞においても研究においても、前場と後場をつなぐアイの段はとかく等閑に付されがちである。そのアイの段には、居語りと立チシャベリがあり、またその替エ(別ヴァージョン)もあつたりするが、その内容は前場で起こったことの繰り返しであることがほとんどだから、それは当然でもある。つまり、現在平均十五分ほどを要するアイの段は、少し前までは能を見慣れている観客には見なくてもさしつかえない場面であつて、知人との挨拶や会話の時間でもあつた。アイの段が現在のようにまとまった時間を要する画一的な形になつたのは十六世紀末頃のことらしいから、そのような見所の状況は優に三百年はさかのぼると思われるが、近年は観客層の変化なのか観客の意識の変化なのか、能の一場面として静粛に鑑賞されるようになってきている。

とはいえ、アイの段の多くが前場の再説である点に変わりはない。そこで、現在では狂言方の語りを味わう場ともなつたりしているが、アイの段の居語りや立チシャベリの内容が能一曲の解釈に役立つこともある。本日の『白楽天』のシャベリはその一例である。

『白楽天』は、現在は日本の智慧を試そうと唐土からやってきた

白楽天(ワキ)をわが国の住吉明神(シテ)が肥前松浦の沖で待ち受け、両者による漢詩と和歌の応酬をおしてわが国の優越性を描いた協能と理解されているが、これを応永二十六年(一四一九)の応永の外寇(がいこう)という国難を克服しえた国家的な歓喜の寓意とする説が戦前からあつた。そう唱えたのは久米邦武(昭和六年没)と高野辰之(昭和二十二年没)という史学、文学研究の碩学だが、この説は戦後はほとんど顧みられることがなかつた。それを新たな資料も加えて再評価し、作者は世阿弥と推定したのが拙稿『白楽天』の成立と応永の元寇―久米邦武、高野辰之の説を検証する―(『世阿弥がいた場所』、初出は平成十四年)で、最近の西原大輔氏『室町時代の日明貿易と能狂言』(笠間書院、令和三年)もやや異なる視点から同様の背景を想定しているが、それを補強する現象が『白楽天』のアイに認められるのである。

『白楽天』のアイは住吉明神の末社である。彼はまず漁翁姿の明神と白楽天が交わした前場の詩歌問答について語り、その結果日本の智慧に感服した白楽天が帰国することになつたと語る。ついで、その帰国前に舞楽が奏されることを立チシャベリで語って、さいごに短い舞(三段ノ舞)を舞つて退場する。現在の

大蔵・和泉両流や鸞流も含めた古台本も同様なのだが、その台本のうち管見で唯一特異なのが寛永十六年（一六三九）の鴻山文庫蔵『大蔵虎清間風流伝書』の次の記事である（近年能楽研究所から『能楽資料叢書』として翻刻が刊行されている。一部表記を改めた）。

間の出立、末社なり。末社の出立、弓八幡の末社と同前なり。

本ほんする時は、弓を持ち、矢を一つは腰にさし、一つは手に持つなり。きりの謡のとき、ものふの八十氏川の流れまで、みなもと清し弓張の月、弓を持ち出て出る時の和歌これなり。きりの謡は白楽天の間のきりの謡なり。

これによれば、末社は「本ほん（本ほん（本盆）」は本式の意）」のときは弓矢を携えて登場し、さいごは「ものふの八十氏川の流れまで：」の和歌をあげて退場するという。他のアイ伝書では弓矢などは持たず、退場前の舞のあとの文句は、「めでたかりける時とかや〔舞〕やらやらめでたやめでたやな、唐土にまさる神国なれば、楽天が智恵もかなはずして、戻るべきとおんことなれば、これまでなりとて末社の神は、これまでなりとて末社の神は、もとと社に帰りけり」というものである。ここで注目されるのは、末社が弓矢を帯して登場すること、その場合、退場前の和歌がわが国の武威を称えるものになるということ、ここではこれが本式（本ほん）の形だと

されているのである。つまり、ここに末社が弓矢を携えて登場するのが本式としているのは、『白楽天』が応永の外寇という国難とその克服を背景に作られた寓意の能であるという理解が江戸初期頃まではそれなりに残っていたことを示していることになる。

また、『白楽天』については本来はアイの段がなかったのではないかという見解が有力である。最初の提唱者は横道萬里雄氏で、氏は昭和三十七年の世阿弥生誕五百五十年を記念した『観世』誌の座談会で、「白楽天」は中人がないのが本当の形だと思っんですけどね」と発言している。座談会では、それを受けて横道氏、香西精氏、表章氏のあいだでつぎのようなやりとりがなされている。

香西 なるほどね。妙なところで中人しますね。

横道 あれは物着程度だったんじゃないでしょうかね。後世無理に中人にしてしまった感じですね。

表 中人がないとすると、後シテの扮装がまるつきり違っちゃってるわけですか。

香西 ないしは別の人が後シテをやるか…。

横道 だけどそれは、前で大口をはいているとすれば、狩衣ぐらいは物着で着られますよ。「万代までに」で切れて、全然別の役の間狂言を隔てて「西の海」と謡うのでは、つながらないと思うんです。

香西 たしかに文句はつながりませんねエ。

これを要するに、シテの住吉明神の「葦原の、国も動かじ、万代までに」とそれに続く末社の立チシャベリとのつながりがよくないこと、それに対して、末社アイをとせば、「万代までに」と「山影の、映るか水の青き海の、波の鼓の、海青葉【真ノ序ノ舞】」がよくつながっていて、末社アイはその間にあとから割り込まされたようにみえる、というのである。

こうしたことから、本来の『白楽天』には中人がなかった可能性が高いと考えられており、筆者もそう考えているのだが、そのことは、さきに紹介したように(前頁の傍線部参照)、末社のシャベリにおいて、日本の智恵に感服した白楽天が漁翁(住吉明神)の勧めで、帰国を決意していることによっても裏づけられる。そこには、

明神わが朝は小国なれども神国にて、人間は申すに及ばず、
鳥類畜類までも歌を詠み候ふとて、その証歌をおん物語り
あれば、楽天も弱々となられ候、その時明神意見申し、日本の
都におん出であつておんためいかなり。これよりおん帰り
候へとのおんことなれば、楽天も合点せられ、すでに戻る
べきとおんことなり。

とあるのだが(『謡曲大観』の大蔵流テキストに拠る。他の台本も大同小異)、『白楽天』の後場では、住吉明神の【真ノ序ノ舞】のあと、「住吉の、神の力あらんほどは、よも日本をば、従へさせたまは

じ、速やかに浦の波、立ち帰たまへ楽天」と言い、駆けつけた全国の神々の「手風神風」に吹き戻され、ここでようやく唐船は漢土に帰ってゆくのである(「手風神風」は当時李氏朝鮮軍の艦隊を襲った台風の寓意と思われる)。従って、アイの段ですでに白楽天が日本の智恵に感嘆して帰国すると決めているというのは破綻というべきで、これも『白楽天』に中人がなかったことを端的に示している。

こんなふうに、『白楽天』のアイの段は『白楽天』が応永の外寇を背景にした寓意の能であること、シテの中人がなかったことについての有力な補強資料となるのだが、しかしそれは現在の『白楽天』の価値を貶めるものではない。現在の『白楽天』は勅使とか臣下ではない白楽天がワキとして登場する冒頭部などは脇能としては破格だが、それなりに二場物の脇能の体をなしているし、応永の外寇という背景を考えなくても、詩歌問答によってわが国の智恵を示す洒落た作品となっているからである。とりわけ後者については、象徴性を基本とする能が時代を越えた普遍性を備えていることを示す恰好の事例と思う。